

○大野佳美*、平井和子**、武副礼子*³、樋口 寿*⁴、浅野眞智子*⁵
 (*武庫川女大、**大阪市大、*³大阪府看護大医療技術短大、
 *⁴大阪女子学園短大、*⁵大阪国際女大)

目的 日本は飽食の時代だといわれ、豊かさを求める欲望のみが肥大化しているように見受けられる。一方、ネパール北部ヒマラヤ山麓の高地に住むチベット系民族は今も伝統的な文化を保ちながら生活しており、その様子は戦前の日本における農山村の生活と類似点が多い。そこで、日本およびネパール高地住民の生活実態および生活観について調査を行い、その結果を比較検討した。

方法 日本では大阪府およびその周辺に住む 23~84 歳の男女を、ネパールでは高地に住むチベット系民族 10~81 歳を対象に日常生活の実態および生活観について調査した。

結果 調査項目で男女間に相異が多かったのは日本であった。「日常生活の楽しみ」は日本男では「ラジオ、テレビ、映画等」が、女では「会話」が多かった。ネパールでは男女とも「会話」がもっとも多かった。日本女、ネパール男女では 80%以上が「日常生活上のことは家族全員で分担しなければならない」と考えているが、この回答は日本男では約 70%であり、男女の役割分担の意識があることが示唆された。仕事は「当然の義務」、「働くことができるのは幸せ」、「収入のため」が日本に多く、ネパールでは約 60%が「家族のため」と答え、両国間で相異がみられた($p < 0.001$)。日本では 80%以上がトラブルや問題の解決は「相互の話し合い」と答え、ネパールではこの他に「年長者の助言に従う」が約 20%あった。日本では高年齢ほど、ネパールでは若年齢の方が「現在、心配なことは家族の生活である」と答えた。現在の生活は「快適」、「現実として受け入れる」の割合が両国とも多かったが、「快適でなくとも満足している」が日本男に約 27%あった。